古今俳諧明題集

冬之部

へ 5
923
4

古今俳諧明題集冬部目録

更衣 初葉
閑懐菜口切 初
小春 二 後初玉
霽 二 後二玉
冬日 六
冬月 六
木穀風 七 後六玉
冬隠 八 後七玉
火鉢 九 後八玉
炕 九
種火
榾杣 十
炭窯 十
亥猪 十一
残菊宴 十一
達磨忌 十一
十夜 十二 後十一玉
夷講 十二
紙衾 十二
紙衣 十三 後十二玉
頭巾 十四 後十三玉
醺醤 十四
水鳥 十四
紫蒙蒙 十四
鴨 十四
千鳥 十五
鷦鷯 十六
鶩 十六
獵 十六
熊穴居 十七

蚝蠣(カキ) 十七
沙噀(ナマコ) 十七
麺條魚(ヒヲ) 従十七至十八
河豚魚(フグ) 十八
魚簗守(アジロモリ) 十八
枯野(カレノ) 十九
枯尾花(カレヲバナ) 二十
枯蘆(カレアシ) 二十
蕎麦刈(ソバカリ) 二十
菜菔挽(ダイコヒキ) 従二十至廿一
蕪菁挽(カブラヒキ) 廿一
生姜掘(シヤウガホリ) 廿一
麦蒔(ムギマキ) 従廿一至廿二
橐吾花(ツハノハナ) 廿二
冬牡丹(フユボタン) 廿二
狂花(カヘリハナ) 廿二
茶梅花(サザンクワ) 廿三
茶ノ花(チヤノハナ) 廿三
金剛纂(ヤツデ) 廿三
枇杷花(ビハノハナ) 廿三
鬼箭(ニシキギ) 廿三
散紅葉(チリモミヂ) 廿四
落葉(オチバ) 従廿四至廿五
冬木立(フユコダチ) 廿六
枯柳(カレヤナギ) 廿六
寒(サムサ) 従廿六至廿八
冬至(トウジ) 廿八
冬至梅(トウジバイ) 廿八
暦賣(コヨミウリ) 廿八
霜(シモ) 従廿八至廿九
雪(ユキ) 従廿九至卅一
霰(アラレ) 卅二
氷柱(ツララ) 卅二

氷(コホリ) 従卅二至卅四
髪置(カミオキ) 卅四
袴着(ハカマギ) 卅四
神楽(カグラ) 卅四
里神楽(サトカグラ) 卅四
亥子祭(ヰノコマツリ) 卅四
鉢敲(ハチタタキ) 従卅四至卅五
煖鳥(ヌクメトリ) 従卅五至卅六
口切(クチフツキ) 卅六
水仙(スイセン) 卅六
寒菊(カンギク) 卅六
寒梅(カンバイ) 卅七
臘梅(ラウバイ) 卅七
寒山茶(カンツバキ) 卅七
寒垢離(カンゴリ) 卅七
寒念仏(カンネブツ)
寒声(カンコヱ) 卅八
鵲巣(カサヽギノス) 卅八
節季候(セキゾロ) 従卅八至卅九
臘八(ラウハチ) 卅九
鶏卵酒(タマゴザケ) 卅九
薬喰(クスリグヒ) 従卅九至四十
煤掃(スヽハラヒ) 四十
餈舂(モチツキ) 四十
年忘(トシワスレ) 四十一
追儺(オニヤラヒ) 四十一
歳暮魂祭(トシノクレノミタマヽツリ) 四十一
裙帯菜刈神事(ワカメカリノシンジ) 四十一
年籠(トシコモリ) 四十一
宝舟(タカラブネ) 四十二
歳暮(セイボ) 四十二

古今俳諧明題集冬部

更衣（ころもがへ）

落れど行くハいやしお海もかへ　一嵐

旅をし連に着せたりころもがへ　維鳩

葛ハ紫跡捨て浮世とかへ　似竹

重ね置し袖へむかし涙や更衣　水雁

開炉

炉ひらき葉に切くち

炉ひらきや一梅咲てかしこま里　安巴

炉塞や江中も雪のかげうつし　常陸府中　崇琴

炉塞や常に震ひもおもし涙、哉　麦舟

猫ひしさや掃出されハ梅さく也　一鼠

人ひしむや膝てあひいて暖まる　江戸 卜入

口切やふさ扉ハはむくとも　湖十

猫冥や雲にも冬の志らせある　青蘿

小春（こはる）

年晴中に一時むつまる小春かな　理然

鶴の羽は霜乾く示は小春かな　凉帒

鶸飛ぶ背に霰はつく小春かな　一音

山人に謡のあちぬてはあり　闌城

桜木に又ちるをもあて小春かな　五稜

備向て芽壁をのぼれ小春への那　万嵐

蘊揺に午睡させぬ小春かな　尋风

又冬にして八日の入は小春かな　李北

何もかも曙をあてめは小春かな　雅寿

菜は花は桜見よく小春かな　可卿

水菜蚤に日の吹ぬけは小春かな　秀律

霎（しぐれ）

池の星又ぢらしくと志ぐれかな　北枝

三枚図一る見て晴れ志ぐれかな　也有

紅葉の濡色更かむ神しぐれ　麦林

誰ひとり撞(ツイ)ては行むしぐれかな　希因

障(サハラ)雲(クモ)れ皆になりますてしぐれかな　去路

逢そのあまさ帆へ曲く志ぐれかな　雁秋

急しに一夜をはめけ志ぐれかな　蒼螢

椑(シブ)柿(カキ)のあり限き庭や神しぐれ　雨竹

席(ムシロ)よけ縁側陽(ヒナタ)やひとしぐれ　上毛新田 老西

月も暈(カサ)里に入けり一志ぐれ　雁志

蒹葭の窗もふるぞ神しぐれ　百夫

夕照のあてにもなりぬしぐれかな　蕉帆

役船をおちうちつぎ志ぐれかな　雲鼎

大(タ)黐(チモチ)刀持を置(ニル)しておく霰かな　可登

不見れど笠に密やかな志ぐれかな　梅路

村しぐれ誠え日の入ほしぐれかな　西羊

降つゞく雨や黎明(ヨアケ)をありしぐれ　去後

箕(ミ)の音(カラ)ありたてしぐ淋この郡　维揚

志ぐるゝや身じかを見れば今朝山　貞川

影へ降浮く一木の溝や一しぐれ　芳野

山里の日を遁まりけりしぐれかな　荻丈

鍋の茶路て来ほしぐ様かな　深魚

竹にみて狂足をやきしぐ様かな　馨城

繕(モル)くも菜碗になりぬしぐれかな　祇丞

田灘(アヒ)は士墨工商志ぐれ哉里　岸虎

おもしろいあをみ原や神しぐれ　大阜

み遷の盞さすもしぐれかな　六柿

ちるさ人と一度にしぐれかな　女　[illegible]人

三日月は屋敷よし神しぐれ　希因

相は実の吹はしきりしぐれ　仝

まのうちをかへも野菊や一しぐれ　涼袋

いふハ又どちらへ菅笠むらしぐれ　由戸

菜一把牛にかゞせて雨かな　希因

ゆく人を一日すぶほしくしぐれかな　來川

菱笠を竹田へかられしぐれかな　晩九

山姥(ウバ)の日をかくしてや一しぐれ　加賀金沢　杜江

烏帽子屋の乾(ホシ)てハおくしぐれかな　虎岡

籠(ツリカゴ)をひとつ置ハかぶり捨ししぐれかな　青　麻父

柴は戸のりよハ焚ぬしぐれかな　柳　徐來

時るぬ乳母は去鼓や小夜しぐれ　乾什

蝠(ツゴモリ)をおしくふくろや神しぐれ　阿坡

階除(エン)へ来ぬ日もぬれあしやむらしぐれ　遠江国　筆馬

禅の嘘(ウソ)今宵はしぐれかな　相模小田原　尾跡

併傘(アヒカサ)はふたりハ赤にしぐれ家里　江戸　不角

乾(ホシ)にぬる鯵のうちわすさぐれかな　涼袋

斷株(キリクヒ)は蕈(キノコ)をかひて神しぐれ　仝

あらし吹けど雲来ぬ夜の籬かな　其角

駕舁の名所をかくもしぐれかな　涼宇
洟紙で押へる漏やもつしぐれ　下総佐原 二水
落かゝる大菜椽に音やむらしぐれ　波□
盃かへて濃茶の茶もまたしぐれ　冠子
妻かられよん富士いくたりむらしぐれ　一音
野猪に都をみせせ軒しぐれかな　近江 幸貞
狙はまだ捨ぬよりしきりしぐれ哉　兎士
背に傍ふ柳の傘やむらしぐれ　仝
走ぬけるうち先に用かしきりしぐれ　巻阿
身にふりかの木綿やむらしぐれ　李北
一日の空にさりゝぬしぐれかな　百卉

借りたる日は濃茶傘やむらしぐれ　兎洲
はやさはに菓子ふるりむらしぐれ　井関 猪史
寒る道に寺はよごれむしぐれかな　巴山
関守は置かれとしぐれかな　祇嬰
うれしさに都へ流ふるりむらしぐれ　武 艸羽
おにくい狐の色紙やまたしぐれ　大輪 其石
栗鼠に尾を見せて落来る霰かな　眼石
見あはせて居れも見あはせしぐれ哉　一嵐
傘は川越てゆくしぐれかな　涼□
似た脚の□くさき拂ふしぐれ哉　白枝
激しくも西へ日の出るしぐれ哉　一□

又ゝ飛ハ旅の雲しかしぐれ　仙衣
鸊鷉の巣は消えもやらで神しぐれ　不席
原中に一ト夢やはふしぐれ　可帰
かけあしく雲の形りかじしぐれ哉　再可
鮪あての出船におほきしぐれ哉　雪叩
猟人の火縄くりへてしぐれ哉　笑牛
炭賣に茶おほせけり神しぐれ　琴詩
山寺の鐘へ切渡しぐれかな　一鼠

冬日（ふゆのひ）

みじかさや指折る間に日ハ見えぬ　笑林

冬の日や寺橋に出る人もなし　蘭球
幽けの日や何もかもぬ渡しも　武村岡 烏夕

冬月（ふゆのつき）

冬の月鐘つくとハ思はなし　涼佛
水洞て泊は底や冬の月　仝
谿しせておもく兎や冬の月　漁遠
文紙や宿に逢ひは冬の月　伊勢 参推
花とても皆ハかへるぞふゆの月　西岸

木枯風（こがらし）

すゞしさは一日吹て居里にけり　涼兎
すゞしさや思ひ出しては何處へゆく　可登
すゞしさやあふぎひくに夕かゝに　古路
すゞしさや掃ば又座くも鄰にる清　魚貞
すゞしさや池のぬけ穀庵の角　白枝
すゞしさや月ゆふまも忘て水のかく　下総多古 あや女
すゞしさやおれぬ柳に衣もまくら　涼佛
すゞしさや浦の篷(トマ)屋ハ錦のます　梅路
すゞしさやこのあと昆(ミカ)波隻(カタ)わ戸　未了
すゞしさや塔まくしと吹の空　上総長南 泥亀
すゞしさや守えて雲さ護法寺　吼圭

すゞしさや一る比毎にも紫あき青　白枝
すゞしさや山もうしろて海へゆく　松琵
すゞしさや泥の果(ハテ)ハあまりり海の音　京 言水
すゞしさや摑(ツカ)むで拾ふもなきめ　麥推
すゞしさや潭(ツボ)をもつれて飛瀧(タキ)の音　一鼠
すゞしさやおどろく鳥を逐まはし　秀陽
すゞしさや廣い示に行と清里　千竹
すゞしさや砂の流る海のかく　眠石
すゞしさや後(アト)はかならず清き鼓　武蔵 揖仙
すゞしさや星いくつ三つ行居處　星斗

冬隠　ふゆこもり

折〳〵に伊吹を見てや冬こもり　芭蕉
夏ふりハ事なしとて冬籠　京俳
つく〳〵と壁の兎や冬こもり　其角
唐土(サウニ)丹子かへるやふゆこもり　凉俳
郭子(カクボウ)は不定めて婦由古毛里　青藍
釜かけてそのいそせり冬籠　白枝
頬杖の無しぬハうれし冬籠　至芳
来ぬ友のうはさハあれて冬籠　一紅
午(ヒル)時一度障子(シヤウジ)に明(アケ)より冬こもり　凉俳
張つめし紙捨に弓や冬こもり　可由

隠几(ケウンツ)に砂糖の華や冬こもり　白枝
炭の波(へ)は白(アヒテ)所に富士や冬こもり　李北
簑(ミノ)賠(ハリ)のきむしと閣(タテ)より冬こもり　古硯
居て居く棚さへ有もし冬こもり　貞丘
畳(ヒキ)閣(タテ)て老の鏡戸や冬こもり　梅荻
花活(ハナイケ)のにうつくし冬ゆふこもり　下毛佐野 長眉
こはまの一蟹のあゆみや冬籠　鶴阜
はく里本は寂見のがして冬籠　文東
嗔(ウグヒス)起きると出は弥生や冬こもり　玉才
風吟に空間(スキマ)の隙やゆふこもりも　武戸宮 蔥叟
松に薪おかしせくふゆこもり　同榛沢 好古

角はるゝ屏風にあたりあてゝをり　烏久

四方山の咄さへあきてあきてをり　素絢

うぐひすに起も慵しぬくもり　荻丈

頭巾着てえ見ぬ鷲やあてゝをり　百尋

灰にまく話の形やぬくもり　思遠

火鉢ひばち

母くの炬燵へうけし火はちかな　祇徳

指の節あらはしてかざれ火鉢かな　武小山　古笠

手は文理を互に見せし火鉢かな　涼洲

香脯の角おてかさつくひはちかな　澗株

数ふやうにして居る火もちかな　紀若山　芥橋

かう寝もしてさゝ火鉢かな　吐涼

医者の手は僕うつて居る火鉢かな　一嵐

琵琶かして座頭の寄る火鉢かな　涼宇

炬燵こたつ

畳をくりてまりのおしまひかな　破了

客舎の志中見せつゝたつかな　杉町

侭妹は負てちからつよきかな　涼佛

手八纔ひにかゝりて居る炬燵の雅　猪史

すりよらぬ顔ても寄る炬燵かな　常陸龍ヶ崎　麦風

偃所てはなしの重さてよりふ　凉袋
袂(タモト)りしけむさのぬけはなたつぶ　三橋
檐の了点背に戻くおたつのな　幾暁
賣ほどの蔓にもちしぬ烷の那　(試お)水音
老(トシ)犬(ヨリ)は一猫なるさこまりかな　一鼠
山城える話(ハナシ)をあぬはこよりかな　破了
りのぐさん硯のそけはおよりかれ　雙飛
倚(ヨリ)そへむあらしぬとてと烷かな　(平戸)兎士
さいあのおとしろしな烷この那　曲州
讀はして荘子のうつはおよりふ　今江

種火　うづみひ

うづみ火やかへしてつかふ葉のあと　文東
埋火や笠ハくして夜ハゆるび　去路
うづみ火やかさな深されよハうつし　出々
埋火や硯の泣うびにいけ垂し　一嵐
うづみひや縫りぬ針の指と了語　為谷
うづみ火やよに懐のあつくまり　十字
うづみ火や花はく力かど暖す里　兜洲
埋火や蔓を体むるひきよれは　東起

榾柮　ほた

楮の火や寂しく見てゆく　涼袋
ほされ火や山明けての夜がくる里　仝
楮の火や梁（ハリ）にやつくたりし物　西羊
ゐるさ火や叱（ヒ）志（シカリ）まへむ麻はる里　千林

炭竈（スミカマ）

炭焼や楮に赤岩（リ）のむせ流き　涼袋
炭竈や小枝も膝（ニタ）ぐ芝だり里　東奴
きみかはや氷室（ヒムロ）の例を叱しけり　城坂宮田 素琴

亥猪（ゐのこ）

猪菊へ飲酒人（ノミテ）のまつも亥猪の客　千山
天井へ幟れかさづくゐのこのれ　柳波

残菊宴（サンキクノエン）

残りさ人にも似てはれる香華　涼袋
酒盞に汁嘗（ナニコ）見そめて残り菊　伊勢射沢 其瓜

達磨忌（ダルマキ）

達磨忌や何に迷ふてかへり花　兎士
達磨忌や何をみるてもふしよ佗し　涼袋
達磨忌や梅へ向ても〆東西　青藍

江戸ものや捨てしまへど雨　物　乙由
江戸ものや餅を気にして都でなし　黄牛

十夜

老僧老婆の京にもおほき十夜かな　麦林
蓮池のおそろしい時十夜これ　涼袋
一もじに炬燵を出して十夜かな　仝
老しせて花一時の十夜かな　禹貢
関寺に夜情のおもき十夜かな　西羊
舂米の輪田を叩いて十夜かな　雪叩
西河のさいハ以ちぬ十夜かな　汶上

かた向にハ饅紀榊ぬきむ十夜かな　兜士
木の端と茶と菓子も十夜かな　雨皐
影子は一夜にうごく十夜かな　涼袋
はじまると児共は成る十夜かな　涼戸

兄比須講

船飯に西日は影や兄比須講　祇丞
木報ほに汲む里よせてえびす講　庭城
精兵の布袋ハさびし兄比須講　巴雀
魚がしらも〇常吊桶やえびす講　去路

紙衾（ふすま）

坂がましと紙帳もおもふ紙衾かな　京 惟然

寐かへしも千鳥の声も紙衾かな　子堂

漏る音におどろかさやもねぬものかな　凉袋

寒き屑もよに着れどもふすまかな　尹里

紙衣（かみこ）

椑柿（シブカキ）しく人にそめてかみこかな　凉袋

世の人は着るをきらはじ紙衣かれ　去路

くすれども人のおひきぬ紙衣かな　春来

木枯（コガラシ）の音を裁縫（タテ）ぬかみこかな　五菱

結びを封じてもかふ紙衣かな　雲峰

後ろ按摩の紙をかみてこの暮　一巣

縫あげの方へ出て来るかみこかな　芋魁

掃せよは後（アト）へふさがる紙衣かな　可登

夜行（ヨアルキ）の嘆かころび紙衣かな　越後新潟 此杜

胡蘆（ヒヤウタン）のやうに常着る紙衣かな　士鳳

間（ヒマ）なきの皺をよらす紙衣かな　吼圭

擇舎（ヤドトリ）人に先ほころびる紙衣かな　眠石

浴（ユ）あがり里の人まで遠のくかみこかな　可卿

こうふひかぬ被と思ひて紙衣かな　常陸 馬才

種火（ウツミビ）へよせ揉（モミ）かへ紙かみこかな　上毛榛沢 祖述

今ならさきの姿見は紙衣かな　素筏

宗祇の偏意地出て紙衣かな　眠棠

男まに一ト撲おろしかみこかな　入楚

頭巾

旅僧の家にしてゆく頭巾かな　西羊

傾城に逢へてたのむ頭巾かな　希因

聾の目象も捨てはさむ頭巾かな　洞居

居風呂のうちも投は頭巾かな　晩帝[?]

剃刀は寒さ児を給を頭巾かな　李北

猫入て百目を様も頭巾かな　東梢

橋もへうかづいてゆく頭巾かな　凉楓

茯苓を味りて居る頭巾かな　凉袋

醢醤 なこう

またみろは未熟にまかれて醢醤かな　洗雪

河豚まではゆるさぬちや醢醤汁　乙路

膳へは首ふもし醢醤の那[?]　徐遠[?]

水鳥

水鳥の一度にさえて鷺も部[?]　凉袋

水鳥は御[?]や卯菜の沉むもの[?]　仝

水鳥や枝にある野山はおぼろにぞ　温故

水鳥や暗(サ)さく隠してゝ波は寄る　西羊

千鳥の来てハ其ほとり月は上　能登福浦　文渠

紫鴛鴦　をしとり

紫鴛鴦は浮むや浮きて岩は立　涼袋

をしどりや筏のとまりかへりても　一音

鳧　かも

江の上に日もうすき洲や鳧は寄る　涼袋

吹あらし中にも葦や葦は野鴨(カモ)　破了

篙船や入江の鳧(カモ)には浮寝　三夕

水史鳥　ちとり

舷の酒あてめて水史鳥ぞ　如本

埋火は夜にハちゞまりな　兎士

一羽啼二羽啼後ハ水史鳥ぞ　巴静

浮の実は今も見ゆる銘ちどりぞ　涼袋

蝦(カ)蟹(ニ)殻(カラ)もつまはさしれてちどりぞ　仝

駒(ダッ)て行あとへこぼれちどりぞ　素園

あとまにも舟出をひかりちどり　希因

枯葦に月おちむて水史鳥ぞ　仝

一あをも結ありあ旅にちらまうか　一印
さびしさハ松にもよしぬちや理ぶら　祇徳
又后のあにして来原ちとまうか　紀州平戸 曲舛
行脚の跡不濡むで手史ゑるな　一嵐
ぬくめてハ耳ちまかへ原ちとり一れ　嘯舟
あら海の息も涼鳴や嘯ちらまし　伊勢 古由
家理之居まで漱むでちと理ぶら　皇一
字ハ来て園へ立龍むや理ぶら　麦林
紙りふむ山もあや磯ちやしま　涼袋

鷦鷯（みそさゞゐ）

目のしちも舞ひする巣立（ソダチ）ちやみそさゞゐ　涼袋
文読む夜毎に並び居ちる枝さゞゐ　仝
鷦鷯毎日来てと只おしり　素丸
役る届く殿にあありし鷦鷯　桃雨
鷦鷯の役をさく仕やみ枝にさゞゐ　一嵐
節孔（フシアナ）をぬけゆく木の葉や鷦鷯　花明
消しに来し後の御池やみそさゞゐ　迂生
墻の中をさゞもや黄菊傍くゐ　曽平
静さも庭様の葉やみそさゞゐ　秋午
擂鉢（スリバチ）の果ハ植樹（ウヱキ）やみそさゞゐ　宮叩
名草は杉戸やぬけてこそさゞゐ　禹貢

はれよよくまでみより鶺鴒　府鳩

鷹野(たかの)

鷹狩(タカガリ)や深田の夜にかしてまつ里　涼袋

驚に又篝焚せて鷹野かな　南蘆

獵(かり)

夕獵や雪に兎の消て帰し跡　加賀 万子

獵(カル)とるや嚢(ノイゴ)篭へ貉(ムジナ)の那　汶上

鉤かりや里小狐も火をけし　美濃大垣 怒風

熊穴居(くまのあなこもり)

穴熊や冬篭のあまり月ひとり　雲和

蛎蠣(かき)

蠣ゝ殻やも捨ぬ先に来　上毛お桜 酔江

沙噀(なまこ)

取百生者と来てなまこかな　加賀金沢 梅左

山水は手本に居る悦かな　白技

角文字のいくつもより歟噀かな　涼袋

漁(イサリ)火を驚く中になまこかれ　仝

鐘(ツリカネ)の海へくゞけてかはこれ　希因

なめらけて力をかくめたる沙咲ふ　為然

藪(ヤブ)るとに爬(ハフ)てみさるか沙咲るか　麦林

人もやうにしゝて見はなまこふ　青藍

西侍か尾鰭(ヒレ)を逃てなはこふ　梅荻

京清の注でつゝのむなまなれ　既侑

楂さしバ芽を出しそるか沙咲ふ　楳鵝

叩ゝ落としハおぼえて沙咲るか　雲芝

麵條魚 ひを ひうを

徹因の手ハ破れて宇治は麵條魚ふ　祇丞

氷皆ひをとにをあつまれい話　宗瑳

菜席(ムシロ)に河原ゟ湯ひうをうれ　东奴

河豚魚 ふくと ふぐ

河豚汁や一家い里しゝて蘋(ヨヒカヘリ)生　急士

河豚汁や後(アト)の自豚も玉のたゝ丈　仝

藪(ヤブ)医者は放(ヒデイリ)懐をうし河豚汁　希因

莵(ニコ)ゝくとくられて鮎(フクト)か那　曽平

鮎(フグ)汁や泥巾されて猿にゆく　一嵐

ぬぐけや人静まつて気ひしゑ　九皐

鮎の友をこし老ふりふくと汁　祇丞

魚簗守（あじろもり）

おもしろい罪ハつくらで魚簗守　雲郎
水へらす川猟（キリヒ）遂もなし魚簗守　栖尾
川中に雪の庵やあじろもり　挹涸
月さへ夏あふてくれよし魚簗守　常陸本郷　得仙
拾ふれし後次めやあじろ雲裡　西羊
けむりさは東山子ハ果（ハテ）や魚簗守　桐原
網の目も洩らぬ僧（ツレ）やあじろもり　三橋

枯野（かれの）

五日（イツツヤ）は筆捨たる枯野かな　伊勢山田　何声
犢（ウシノコ）は嘗（ナメ）てゆく枯野哉　見風
見るまても捷径たつね枯野かな　涼備
龍膽（リンダウ）の折よう来て枯野かな　仝
蓑笠に人消て枯野の朝　棠江
京くと目の行る軒かれのかな　播州　其蕙
行先の雪を見おろす枯野かな　洗雪
庵ぬ家のまさくきざしの枯のかな　青戸
骨こるに出かれ出来る枯のかな　珠李
鈎（ツリ）簾（レ）鷹（タカ）の雲摑て行く枯野かれ　巴静
松原へ人吹かれて行く枯の哉　雲郎

松むらハあけてみれバ枯野かな　浮石

常磐木の多咲て見せ枯野かな　上毛小泉 右交

村ひとつ瘦てならぶ枯野かな　似竹

杖に影立添って行枯野の旅　其舟

鶴に倚て力ハめぬかれのかな　白志

影法子(カゲボウシ)の道寒便かれ乃かな　涼楓

老ぬ松らしい枯ひでもかれのかな　武蔵沢 閑珠

馬下りて野の原(ヤハラ)ぐかれ野かな　北川

枯芒花(かれをばな)

ともかくもならでや雪の枯芒花　芭蕉

枯てうら汐に青あ清芒花かな　信濃上田 芳洲

従(ツイ)て飛(ブ)夕日の斎(スリ)やかれをばな　文露

海までハ富士ねそ野や枯芒花　再風

湖(ウミ)に皺よせて中よし枯芒花　涼淵

あしりそ形にほ雌の石や枯芒花　京 文下

枯蘆(かれあし)

枯蘆や鶴の影(ヒタヒ)に日ハ千し　破了

蕎麦刈(そばかり)

蕎麦刈やあげろへ直な芝のつく　紀州平戸 雨夕

莱菔挽（だいてひき）

下うもとらへて居ろゝ莱菔挽　兎士

片ひしさハ源滅野れ背や莱菔挽　加賀金沢 白貴

四ツ町れ戻ずるあり莱菔挽　涼袖

遠山を的（メアテ）に反済やだいてひき　祇丞

野称車（ニゴト）の尾ハ揃ずり莱菔挽　其麦

浅原も層楼（ニカイ）ハ字し莱菔挽　一巣

藻と来り船の多い去む哉　希因

ぬけて佳くひとま角力や莱菔挽　入楚

莱菔挽去にありぬ馬たゞの里　素筏

兜（コ）にまけて老の矢部や莱菔挽　洗雪

深輜（アユ）く水さ美濃へ返しや莱菔挽　涼袖

莱菔挽打寄て休ミミ鮮ずす　雨篁

松ほにうしろのつくやだいてひき　首平

山圃（ハタ）にかくきさ莱あずす莱菔挽　青藍

見て過ぬ人の励（ゲ）ミやだいこひき哉　去路

夜岐（フタマタ）にんあて河ず多ハおむ哉　時鶏

蕪菁挽（かぶらひき）

降るとても根の多いぞや蕪菁挽　南部 白扇

繞首（ウデサキ）に根子もつうしかゞゞひき　和水

かけあつの尻ハみじかし茸蕎枝　信濃松本 不重

生姜掘（しやうがほり）

一片（ヘギ）ハ攫（クハ）の粗（リウ）笋や生姜畑里　陸奥桑折 可貞

麥蒔（むぎまき）

麦蒔やねるとふる里遠く来里　涼佛

麦蒔や一畴（ウネ）ハ又むかふ隣　麦来

麦蒔や志ぐれて夜明（アキ）ることし　希因

麦蒔や谷へ翁源の八尋もん絶　百卉

麦蒔や桑山子も来てあそぶまの里　双羽

麦蒔や餘ぬ匏（フクベ）のかゝはし地　西羊

麦蒔や穂にあやかれ枯尾花　涼佛

蒔つめて眺（ナガメ）るゝや麦はたけ　仝

橐吾花（つはのはな）

手ぬぐひ（テヌグヒ）に霜の滴（シヅク）やつはの花　烏林

臺（タウ）にふる川佛んはるし橐吾花　秩父 蕎々

冬牡丹（ふゆぼたん）

あまふけの衣（エ）刈（リ）やかさ添て冬牡丹　大和 千代

猫の目は時（ト）観（ケイ）ハせハしぬゆふかすみ　挪居

太白の雪でまかむや多牡丹　涼傭

狂花 かへりざき

二葉ぼや絶まの春をかへり花　菜園

能因もうづはらしかへりさき　双飛

一さかり芸いそぐじやかへり花　見阿

今染て見ても翫石(アサギ)や可楽里波奈　晋薀

枯枝へ息のゆくへやかへりさき　上毛板の花 一桃

かへりさき霜もせぬ秋に来し菊　希因

燒炭(スミヤキ)の窯あらためてかへりはな　麦舟

たまさかにてひとつ川ただの李狂花　鳳澤こゑ山 巴游

おれても追つく霜やかへりはな　艸羽

茶梅花 さゞんくゎ

茶梅花や霜に暖ぬ垣に添て咲ル　小見川 游江

茶梅花や立てば居士衣に啄(キトホリ)通　祇十

茶花 ちやのはな

茶のむやとがめぬこのいろもせぬ　其丸

茶の花や汲ぐも出さぬ火たき多る　希因

茶の花や利休は目には芳野山　素堂

金剛纂（やつで）

沫雨（シブキ）もあてぬやはでや花の時　上毛倉賀野 烏竹

枇杷花（びはのはな）

夏冷さうなものを今から枇杷の花　呉江

翡翠の声さへ冷し枇杷の花　司雅

菓梅（サリ）花について見れや枇杷の花　琴詩

鬼箭（にしきゞ）

みしさやてかれくて霜またれ　奥仙臺 菓二

にしきゞやもみつよくも松の縁　此君

散紅葉（ちるもみぢ）

寂しさに夕日の岩や散もみぢ　能州輪島 楚角

時の色よりも見えれ散もみぢ　仙臺 左洲

惜まれて滝（ウヅ）のましれや散紅葉　一音

山門を碎くれともちみぢに　複雪

一霜をつまんで落紅葉に　画洲

落葉（おちば）

わびしさはたらしにしても落葉に　巴静

鐘（ツリカ子）一口吐て落葉かな　笑牛

松鼠(キネズミ)の籠(サラヘ)をくゞは落葉かな　一音
不束かくまで木もくびれて落葉哉　白枝
跡にないおとは見えぬおちむうかな　扇水
見はらしに百日ねもれちばこの哉　大阜
日の錦は猫つれ出ゆく落葉かな　下毛羽に　静山
夜あらし皆にむかふまで落葉かな　一嵐
池をまく藪の葉にある落葉かな　烟瓜
先つ山の里かくまで杉もちむうか　李北
水に浮く枝はしけて落葉かな　眺舟
星まで里池をあかつき落ちかな　三橋
是までにつまの出来る落葉かな　汲水

風上へ日きかうつけて落葉かな　玉貞
軒口の風をくゞりて落葉かな　古山
宮なはとてあまりた影落葉かな　斗光
今捨くと土返るは見て落葉かな　青盞
松猪へたつひて見る落葉かな　巴臼
種(ウエ)樹(キ)屋に春の出来る落葉かな　百道
見ちらちにほのかさる影落葉かな　其竹
庭かとい枝のそよぐぬおちむうか　一轂
水仙に衣の出来た杉は波東南　能登七尾　合浦
はめてある新田をかくれちばうか　同　腄龍
やりかけに橋こしらへる落葉かな　可樂

大きれ無て形におちたる那　乙路

精出して見ても夜に入る落葉かな　巻阿

伐株の残りけら風松ちはゝの船　奥郡山 圃中

舟河のほとりをめぐる落葉かな　艸羽

夜坂(コアルキ)の輪にしら洗於波東かな　二江

寄生(ヤドリキ)にも夜の鳴て木の落葉かな　涼帒

斲木(キツヽキ)の音はみえてに落葉かな　仝

逆猪(コシコヤ)席の洩あれ出して落葉かな　白水

飛石を草の践(ハラ)をおちたる那　芭叩

もつしは森に来し洗落葉かな　麥林

東の月たゝき志けき落葉かな　仝

冬木立(ふゆこだち)

海見えて家家潜(スコ)し冬木立　江史

三芳野も紙子の色や冬木立　乙路

冬木立鬼の住家もあらざりし　梅路

白壁の一軒見えし冬木立　起風

斜(ヒノアシ)日のうるうに浅けや冬木立　洗雪

山々と起りけりただ降雲や冬木立　涼帒

枯柳(かれやなぎ)

よきえて桜もさびし枯やなぎ　涼帒

枯柳まいてこそ剃もせじ　笑林

枯きたる木の瑞もしぬ柳ゝのかみ　五仙

寒さはむ

松子の氷をも歯ぎしりさむさ哉　左十

君ハ今蓆もかしこさむさふ　一音

茶家のけいこも文てを書さる哉　双飛

奥底も志らぬさむさや海の者　前川

起ぬまと忘れハせぬぞさむさの那　危士

口れくにあふるの出ぬさむさの那　丁光

影法子の曲合まふさむ法な　上毛桐生 百蛙

立雪をのこれさむ法のかれ　西羊

頭計に氣の乗らぬはむさふ　伊勢桑名 樋臣

梅嫁に火鉢の高きさむさかな　凉佛

麦藁の泥いしまはさむさ那　杉路

袪の背をたくはむさ那　可由

寂かくまとの冷え声もさむさのかな　雲和

縁さあるをうしろてさむさ哉　嘯山

柝に紙にも混はむさ那　未了

巨鏡へ形のもしぬさむさの哉　桂露

手を抓ハ座敷の屏さむさかな　凉素

枝のあは直路もついてさむさの那　案以

寐てをハかしこまりしハ寒さかな　粗藝
上下で太ユのこるさゝむけらず　百卉
捺掃てつらゝの墨ハけむさうな　西華
袪(リデッチ)に蓑のもさまハ寒さかな　涼宇
椿へまくゝ人ハやさ寒さ哉　眠石
唇に煙管(キセル)おふえハさむけゝの哉　漁遠
舩頭に皆振(ツリて)ふてさむきうな　王才
松原のもう来しハ寒さかな　文東
ゆるゝ濤士の佗びハ寒けゝの那　一胤
埋火の下へ突込寒さゝの那　深妹
日系の小(コ)膝(ニタ)にいそく寒さ哉　雨笠

老僧に鐘の七過ぬく寒けう那　杜门
比山のちふ来しハさむけう那　汶上
乾(カ)過(ラ)鮭(サケ)魚の戸に肌あつ寒さかな　黄牛
鴨の尾まん被へもハ寒さかな　賦石
粉園(マル)い漬(カッパ)衣のうおく寒けかな　破ろ
ゑ犬(スリイヌ)もひきしめて身ハ寒さかな　東起

冬(トウ)至(ジ)

挿(ナゲイレ)花に一陽ぬ添むやうじうな　梅路
埋火も極ハむけをうに冬至かな　白陀

冬至梅（トウジバイ）

日晷（ヒトケイ）の狂ひそめけり冬至梅　汝之

暦賣（こよみうり）

月を数へ年も買ふし暦賣　武八幡山 夏生

霜（しも）

行燈に針さくらしと霜夜かな　去路

水晶も日ハとまらで霜はしら　桃由

水仙ハまふきや菜ものはな　笑林

菜の殻（カラ）を焼ハ見えしほぞ朝の霜　加賀 大睡

神霜や物の光を避さて行　祇丞

草にまく旅ハついて霜夜かな　甲州 明大

そつと置く物に音ある霜夜かな　伊勢 鷺浦

花くさを嗅出せ馬や今朝の霜　洗宮

樏（カンジキ）の滴やおちて霜はしら　安里

鉾猟（カリ）の野狐（こ）のあしや霜の朝　漁遠

舂米（コメツキ）のくだけもやりさけ霜　兎洲

神霜や蜷ハおどろの鬼かはら　阿僧

漁火（イサリビ）の焚（タキ）けしくそ鶏の声を　李趙

葛の葉ハ表見えさうりけれ声を　芭蕉

柱へも寒さの徹（トホ）る霜夜かな　洗雲

榾柮は火のおりし燃は雲あかり　其椿

旅士も二夜三夜のしぐれかな　上毛伊勢崎 笑臥

須磨の浦ゑてしまし霜あかり　相模小田原 梅巴

初霜や茶園萱りし野はらかな　野坡

雪　ゆき

初雪や猿は袖おもしろい　江戸 沾山

讀ことしいくど敲くや雪の門　去来

いざゆかむ雪見に轉ぶところまで　芭蕉

家ひとつ雪から出たり雞の声　大至

初雪や麦かくし松もそよぎまじ　利く

初雪やまたくりんともせぬ櫻川　如本

初雪や大きにおどろく鴨の綿　佐渡 洞芝

初雪や花かと見ゆる岩にゆく　左菊

初雪や柳の葉は出てゆかれし　麦舟

枝炭もおりしも色し夜の世哉　武 梛仙

なりさき淑田の旭やかさかさ毛　笆叩

初雪やこちにみたるか人は誰　其角

酒盛まて兵士ひとり夜のゆき　巴丘

狙飛て斥枝ましかし哉雪松　涼兎

弓伏てしぶき者や竹の雪　和鳴

あらさびし琴に畫しかして古き松　柳衣

初雪や葉と添うちにかの松　百卉
住吉の橋凍(コル)めりつもて船のゆ哉　白枝
初雪や明らぬ朝とおもひけぞ　伊勢桑名 柳英
おろしてハ雲の重荷やかるさ雪　旺菜
初雪や他(ヨソ)處へつらんと氷(ツララ)かな　凉佛
折ふしの笹柳の形や朝の雪哉　仝
初雪や先吹とて竹に至く　武越谷 文隣
雪の日や見えも椎れ木下暁　雨石
重さふる人のまぬけや朝の中さ　麦由
月落て雁一いろや朝の雪　麦由
物焚た庭にあり竹の雪　洗市

牽牛花(アサガホ)の蔓ハかつてゆりに雪　上州館林 奕馬
埃もり林藪(ヤブ)きへりたけさ雪　其梅
初雪やつめたさハ目の底にあり　素園
並にも浅見の下やかさ比ゆき　素臨
本も行を撓(タハ)ませぬ程の雪　香碑
初雪や先厩(ムマヤ)へし消し初深　許六
彫(キ)木(ツキ)香の柱へ来りそ程の雪　乙孫
袖吹ておりし雪晩(カフロ)や朝の雪　李北
初雪や瀬ぞりおそ添し紀　江戸 鶏郎
朝の雪さとてほるハ何ぞ　京 紹巳
りさ比雪かいかが(リカ)橋のまりそめ　下毛佐野 勇尾

宿かぬしそ翁の人なれ雪の庵　上毛太田 浣江
初雪や跡かしこき水のうへ　麻文
魁(サキ)了見紙雪はあつさや標(ミヲツクシ)澪　青藍
其翁ハ又攤(ヒロゲ)て見さし雪囲(ゴロ)め　兎上
盛は宿に絶処(ヨソ)の勇み彼や乃波の雪　凉阿
雪の夜も粗(ソハウ)末ハなりし饑通　川夕
初雪や撮(ツヽム)よ痕(アト)に草拂まん形　甲覇
遂(ヨゲ)もせぬ雨の陸里や乃波まん雪　可卿
塔ひしり記して至やりふの雪　乙路
後里本に幕の痕(アト)や其翁の中さき　木路
雲にして不二うし春なりの雪　常陸土浦 石牛

霰 あられ

階除(エンサキ)端に拝のこうよあられかな　白枝
琵琶屋く音を眺(ナガメ)侍りしあられかな　艸羽
瀬(ツヽヅ)いて露唐(タマ)へあり侍あられかな　冬渉
第は花の溝あふれよ紙霰かな　五菱
伯母(ソラニド)の沖でもしく霰の跡　信濃高遠 木志
棋(ゴ)の音は橋へ出てゆく霰の跡　青戸
茶うし椿をるすあられの跡　武松山 霜琴

氷柱 つらゝ

瀧のしらゆひ結もて氷柱かな　去路

手拭をかけてみる軒の氷柱かな　今枝

諺本に旧のふとはつらゝかれ　麻又

淀あや里につまむで見る家氷柱かな　於周

竹のくりして落ちる氷柱かな　涼守

春菜史の後ハ割れるはらてかな　洗雪

擽船まで拾ひれ拾はつ雫かな　破了

氷 こほ里

書かけて来ると雅らの寂く氷かな　深魚

氷深あや鮎と去べき硯まで　雞口

一川松ひとつに来る氷かな　江戸 春来

氷るをとふ鮒にまた見る氷かな　扇文

魚板に水の鯖や落ちぬ里　柳四

中結へぬ許田の手や落てぬ里　洗雪

枯葦の日を見て立○深氷かな　浅府

氷るの雛へ深むさは里かな　雪森

立いあを見てる見せ氷かな　文東

氷の洞は鏡も出来つる氷　其楊

濁か今木の葉は蹴る氷かな　西峯

書里つめて底の洞る氷深かな　波上

氷深あやたるもなし　一嵐

いろ／＼の指を極めてほまりかな　白枝

画のちけむれにして並くれりかな　眠棠

不山に薬の越みて不里り那　一音

孝行の謗るにハ見られぬ求り那　武志　菊路

汚のまゝ移つて明ゝむ来不里りな　信濃上田　琴守

撞(ツリカネ)鐘ん魚へちゝ無ぬ求ゝの那　西羊

掠借の圍繞哀て如れ家求りかな　一嵐

篷船乃兎りし勤くてほ里ぶ　越新潟　井波

水杓(ヒシヤク)てハいふ了しゆぬまで不里ぶ　柳水

田の隅にころちりれ求り那　江戸　雪秋

鯉鮒(フナ)に眼瞼(マブタ)の出来るれり那　下毛佐野　可笑

爺かりて空さを叩くてふまりかな　玲結

蠶屋(かいこおさ)

蠶屋や泣ぞに刹那ハろふはる里　秩父大宮　柳波

捨苗(もりまき)

捨苗や下ゐるりし肩もかりて行　杉町

捨苗やいらしぬ足もれとるし伝　上毛高崎　東里

捨苗や毬(カヾ)鞠出しておめでさが里　笆叩

神樂(かぐら)

衣桁干や象息ぐさき假面かな　其角

里神楽（さとかぐら）

むつかしき拍子もみえず里かぐら　首丘

槖籥祭（ふいごまつり）

殊の出ぬ都しそぬいではつりけり　兔由

袖敷（もちた）

今までにいくつ破さぞ袖たゝむ　兔士

壷の出涼盃の口や袖たゝむ　涼仲

謹がとめて別離しそで袖たゝき　一嵐

衾は破れ後光やもちたくを　素山

琵瑟（アコタル）のおりくやうし袖さゝさ　几山

あぶなさに調子ハあげず袖数　雨董

ひやゝくとかれにおりくや袖数　意山

ゆりねぐ節がつかねで袖さゝき　多少

律法の堂ハ志しまぐやはちゝてき　梅左

年ゝも都みてや涼や袖数　希因

衾塚ハ七ツの衣丸袖さし衣　麥浪

猫（ヒヤウタン）葛小後生の種やもちたく衣　百川

いろくの瓢（フクベ）はなしてや袖さゝさ　柳居

門番と茸かりや神紋　　[illegible] 鳥桂

瓢蘆(ヒヤウタン)も酒ふしげし神なく成　　子永

何神の留守ておりぞ、神なくさ　　雁平

表り(ヨアハキ)をおしまぬ祖師や神紋　　雲郎

昼舟れたおかい(ワカ)都しはちな成　　乙路

ねころの小ガハいしまぞ波もなく、哉　　芦洲

百八の寡やおもへて神なさ　　平戸 波光

煖鳥(ぬくめどり)

鶴ハ又暮にも活しぬくめ鳥　　伊勢山田 季覧

神の木も伐く無原あそぬくめ鳥　　里楓

向曉(アケカタ)ハ人にも見せじぬくめ鳥　　西羊

逃て出る時や旭にぬくめ鳥　　芙々

昼ハ又睡(ネフ)るをぬくめ鳥　　浣雪

おかへ帰時や大事にぬくめ鳥　　涼佛

海鰌搶(くぢらつき)

逐つめし海小もまゝて海鰌(クヂラ)搶(ツキ)　　東宇

鯱尾(シヤチホコ)となりて追ふや海鰌つき　　汶ど

水僊(スイセン)

水仙や床(トコ)へ炬燵(コタツ)をさめにゆく　　露蝶

水仙や鬚籠(カゴ)で見ても細(サイ)工ことの　宵叩
水仙や達磨もみるか軸の香　李北
手に目の勤かぬ暁や水仙花　石刕馬
水仙や望いかし花おして見る　可や
水仙や煤掃くらし将々し　多久

寒(カン)菊(キク)

寒菊や糠(コヌカ)のかゝる臼の端　芭蕉
寒菊やまそくる雪にてげて行　乙孫

寒(カン)梅(バイ)

寒梅や寝鳥(トリ)のかれにあてゝまて　涼袋
煤掃の後(アト)で目をあけ梅の花　兔士
あまりさぬ宵理も美し梅の花　涼袋
ちぬかしよ花はなしらぬ見はな　江戸素堂
子をこそ来のこし寒さうた　里郷
匂ふる麓(ヅ)のは月し梅は花　城ほ浦梨花来
飯炊も白し寒き梅　五菱
たそ明(アケ)は磨や寒の朝　二毛
誰が部も来つむ花や寒の梅　涼袋

臘(ラウ)梅(バイ)

蠟梅やまだも消さぬ花のいろ　伊賀上野 土芳

冬山茶(かんつばき)

色の色も寒しげに冬山茶花　汁ふ

寒垢離(カンコリ)

寒垢離や夏の流れおそろしき　安里

寒垢離や人は寒さを消して行　雨篁

寒まゐりや一口飲んで身を固め　伊山

寒念佛(カンネブツ)

雪折をおして行や寒念仏　買明

拳(コブシ)ふけ戸の開(ア)くほど寒念仏　涼佛

寒道(ワジ)へまてく路に来るや寒念仏　涼楓

向暁(アケカタ)の西へ向まして寒念仏　白枝

子に抱かせ寅まで抱さぞ寒念仏　汲上

耳塚の底へ徹(トホ)るか寒念仏　東起

寒の声く信(マコト)れ細や寒念仏　古由

橋へ出て紐に積ありや寒念仏　豊後大浦 至志

淡あかくの凡身ぬくし寒念仏　邑叩

日のうちに念ぶんをしたり寒念仏　一嵐

寒聲（かむこゑ）

寒こゑや節に婦人は麻もつく　淙倫

寒こゑや嗄（かれ）て噺（はなし）も火にあたる　吐雲

鵲巣（かさゝぎのす）

鵲の巣や橋わたしハ背わたしを　奥素村　也車

節季候（せきぞろ）

節季候や夕日の餘寒て帰る　柳居

節季候や何を云ても受入ぬ　一巣

節季候や息の白に橋がある　書盈

節季候や顔をも持ていそがしき　麦舟

節季候や我ものに酔て歩く　一紅

節季候やしはすの春を懐し　乙路

節季候や立帰けぬ顔ぶれし　淙倫

臘八（ラウハチ）

臘八や流す水もいつのまに　素園

臘八や餅そよくと枯芒花　嘉舟

臘八や星かしきさし山かしき　吼圭

臘八や瀑（タキ）水もやつれて降（クダ）る時　帽千

臘八やまゞす眠の雪毒　大睡

雞卵酒（たまごさけ）

玉のもち泉いて玉や雞卵酒　上毛高崎　九江

薬餌（くすりくひ）

軍薬も見出しさも何里薬餌　士喬

児等（コドモラ）ハ尾を欲しう(さ)ふや薬餌　紀伊代見　漁遠

桐（ヒノ）キ火など鮑に利（キイ）よ里薬くひ　九皐

夜着（ヨギ）出して酒の甲斐や薬くひ　一嵐

配剤（ハイザイ）を猫にかくすや薬くひ　　

猟人に弟子も従（ツイ）より薬くひ　琴二

看経の代りも有里薬くひ　汶上

羽太来（ハタライ）の毛やさよ薬くひ　涼袋

法力も厘りてや今年里くひ　西羊

煤払（すゝはき・すゝはらひ）

大黒の日向（ヒナタボコリ）や煤もらひ　麦林

煤きさや何を変へる里も起炬燵（オキコタツ）　嘯山

竹にもむ人きそえより煤掃　涼袋

粉本（フンホウ）のたきそめてや煤はらひ　仝

帷（カタビラ）で来る龍や煤はらひ　越後　大戸

まくはる我や捨（ステ）らし物の對よ来　入楚

古反古(ホウゴ)よむ女ハゆかし煤はらひ　銕角

煤はきや鼠も逃てきつゝしむ　江戸 曽代女

梅椿をつまむで来る煤はらひ　青梅 女 せん

仏壇のむろに入れ日や煤払　維鴻

煤掃や船ハ濡もとましげ　破了

煤掃や用のあらぬ部屋て居る　素鶴

煤掃や柳桜の月もあらず　意山

煤はきや女の昭ぬかぬ人喜び　一鼠

舂餈　もちつき

餈(モチ)つきや見えて居るふちに月と花　加賀金沢 乎哉

畔鶉ぐやうる往来や餈(モチ)席(ムシロ)　江戸 露井

歳忘　としわすれ

自嘲(トケイ)禅さく忘れて又も年忘れ　多少

小流の歯を濯ぐ人や年忘れ　治雨

おぼゆるにおもふハなうし年忘れ　示行

儺　おにやらひ

物(ヒ)ゝ骨(フヂ)もまはじと角や鬼やらい　出雲杵築 知乙

歳暮　霊祭　としのくれ　たままつり

年縄の末は日もさし霊祭　同士

裙帯菜刈神事

水底へ御灘のさや裙帯菜刈　汶上

年籠

鶏の声もきこえに年てこそ里　斗光

いかなる二見の夢や年ても里　梅墨

年まれ里夜の待ヶ我は志ろくと　珠李

寶船

一艘にあまる枕や反しかね　坊充

歳暮

花鳥は果や鮑骨に赤海鰹　柳居

茶までの間道をかし年関　去然

宿ひよく松よかりけり年の暮　以秀

あちこちと誠えくなし年の坂　雨篁

神風は気がぬいるや盛りなれ　菜仲

松杉のと鄙を出れてしきてや　馬光

乾柿の仁粒も凄さき年果ほ　祇丞

まきまきに撞擣をて供き果ほ　紙棠

四書机の松へかりきり年のくれ　以言

さり原その皆物貴しうしれくれ　雪叩

おくもの殻もちゝし夕かしも　西華